霊元院の修学院離宮御幸と後水尾院追想の場所

『霊元院法皇御幸宸記』の解説を通して

A STUDY ON THE SHUGAKUIN IMPERIAL VILLA AS THE PLACE WHERE RETIRED EMPEROR GOMIZUNO-O IS RELIVED

Through the analysis of the itinerary by retired Emperor Reigen

田中 明*

Akira TANAKA

The purpose of this paper is to clarify the meaning of the Shugakuin Imperial Villa as the place composed by Retired Emperor Gomizuno-o. Retired Emperor Reigen, who is the son of Gomizuno-o, wrote the itinerary about the experience he had in this villa. In the itinerary, he remembers his father frequently, and sometimes he relives and reproduces the playing his father did there. Through the analysis of the itinerary, the paper considers the intention of his visiting, and the meaning of the place where Gomizuno-o is relived.

Keywords : *the Shugakuin Imperial Villa, Retired Emperor Gomizuno-o, Retired Emperor Reigen, Reliving, Place, Composer*

修学院離宮、後水尾院、霊元院、追体験、場所、制作者

1. 序

修学院離宮の造営は、承応4年(1655)3月における後水尾院の円照寺御幸^{註1)}以後着手され、概ね万治3年(1660)頃までには一応の完成をみたものとされる^{註2)}。またその造営には後水尾院自身が積極的に関与したと考えられる^{註3)}が、実際いかなるかたちでその意匠や構成に携わったかは不明な点が多い^{註4)}。

享保期の山科道安によって記された『槐記』^{註5)}においては「仰ニ、アレコソ御亭ヲハジメ、御庭ノ一草一木ニ至ルマデ、盡ク後水尾院ノ御製也」^{註6)}といわれ、修学院離宮の造営がまさしくその細部にいたるまで後水尾院によってなされたものとされている。修学院離宮の意匠が後水尾院自身によるものと考えられるのは、概ねこの資料によっている^{註7)}。だが一方でその『槐記』については歴史資料としての信憑性が問われることがあり、後水尾院自身の意匠による修学院離宮造営が当時の公家衆の認識としてあったことに推論を留めておくべきとする見解もある^{註8)}。その造営に際しては平松可心など多くの後水尾院側近が参画したものと推測されている^{註9)}。

しかしながら造営に至るまでの経緯が如何なるものであれ「後水尾院、別宮をたてさせ給ひ」^{註10)}などといわれるとき、少なくともそこには修学院離宮の造営者としての後水尾院が明確に言い表されている。また一方後水尾院崩御後の修学院離宮をして「後水尾ノ院ノ離宮」^{註11)}「後水尾院之行宮」^{註12)}「後水尾院の別宮」^{註13)}などと称され

る例も散見されるが、これらは離宮ないし行宮といった一般名詞に後水尾院の名を冠すことで、固有の名称として修学院離宮を指したのである。これらは所有者(経営者)としての後水尾院の名を冠したものとも言えるが、上記と同様にその呼称が同時代において広く共有され得たとするならば、修学院離宮の場所を示す際に後水尾院という人物が思い起こされていた事例^{註14)}として考えられよう。

修学院離宮において後水尾院が思われる事例の際立ったものとして、その皇子である霊元院の修学院離宮御幸が着目される^{註15)}。後水尾院を身近に感じ得た立場として、その思い返される事柄は詳細に及ぶ。霊元院の御幸において後水尾院への思慕の念が如実にあらわれているとされる^{註16)} 所以であり、修学院離宮の既往研究においてもそのことに触れた論考は少なくない^{註17)}。主にそれら論考では御幸にまつわる追想として、特に霊元院から後水尾院への父子関係の追慕として取りあげられてきた。

しかしながら霊元院御幸において後水尾院が思い返されるとき、それはあくまで修学院離宮の場所に即して、或いはその場所に促されることにおいて行われ得たものであるから、本稿では修学院離宮における場所の問題として後水尾院追想の事態を考察する。霊元院御幸の分析を通して主題解明を目論むものである。またその御幸については前稿^{註18)}に引き続き、霊元院による御幸日記『霊元院法皇御幸宸記』^{註19)}(以下『御幸宸記』)を用いる。

* 京都大学大学院工学研究科建築学専攻
博士後期課程・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.

2. 靈元院の修学院離宮御幸の契機

2-1. 後水尾院追想と「此山」

靈元院は後水尾院の第19皇子として承応3年(1654)に誕生し、寛文3年(1663)後西天皇から譲位されて靈元天皇となった。後光明天皇崩御以降の後西天皇から靈元天皇への皇位継承は後水尾院の勅定によるといわれる^{註20)}。貞享4年(1687)東山天皇に譲位すると靈元院は直ぐさま院政を敷いたが、それ以前の在位中より譲位後の院政を強く志向していたため、朝廷内においてその基盤を徐々に確立していたとされる^{註21)}。靈元院は「朝廷復古」を掲げ立太子礼、大嘗会、四方拜など長らく途絶えていた諸朝儀を次々と再興し、自律的な朝廷政治を目指した^{註22)}。また東山天皇成人以降は一旦院政を離れたが、中御門天皇在位中における東山院崩御直後から靈元院は再び院政を敷く。その院政は以前と比して幕府との関係を融和的にすすめたものであったが、靈元院の治世以降その朝廷運営は確実に自律化の傾向をもったとされる^{註23)}。靈元院は後水尾院につづき正徳3年(1713)に落飾して法皇になるが、結果として現代にいたるまでの最後の法皇となった。

政務の面における靈元院は、政治的にも文化的にも非常に影響力を有した後水尾院院政^{註24)}後の朝廷運営を積極的に行うが、一方で特に文芸の面においても靈元院は後水尾院に比肩する一歌壇を形成した^{註25)}。寛永2年(1625)智仁親王から古今伝授を受けた後水尾院は後西天皇らに万治御点^{註26)}、古今伝授を授けた。靈元院は天和3年(1683)に後西院から古今伝授を受けている^{註27)}。また延宝2年(1674)における三部抄及び伊勢物語の伝授については後水尾院が靈元院に直接授けている。そうした経過からも後水尾院は靈元院をその当初から自身の歌壇を継承すべき存在として目していたといわれる^{註28)}が、他方靈元院においても後水尾院歌壇を継承すべく意欲的に努めたものとされる^{註29)}。

以上事実関係として靈元院における後水尾院との関係を概略したが、以下『御幸宸記』における記事にその両者の関係を探る。

『御幸宸記』享保10年10月の条、靈元院は修学院への御幸途中に林丘寺の普明院を訪問し、後水尾院の影像に参拝したことが記されている。

けふは先づ林丘寺にぞ行く、老禪尼公に掲して此度の事悦び事^{註30)}申かはす

(中略) 旧院の御影の前まへにまいりて礼拝念誦をいたす

侍 故院御影前述志

さとみし君がおましとあふぎみむ

上のうへなる蓮の臺を <1>

かくてまた

あわれとや猶みそなわすたらちねの

をしへし道にいたりえぬ身を <2>

今も猶親のまもりのあひそはゞ

寿のみやせめてつゝまじ <3>

此山に十度はきけり行きさきも

君がみゆきの数にあへてよ <4>

この山にあらぬ山々野へ河へ

君がみゆきのあとならばや <5>

かやうの事をもおもひつゞけたれど、御影のまへには、はゞかりてえたてまつらざりし[10-10](注釈及び<1>から<5>までの番号は筆者による)

靈元院は林丘寺を訪れると後水尾院の影像に参拝し、その折の気持ちを「故院御影前述志」として歌に詠む。歌はここで計5首詠まれている。それらを概観すれば、はじめの一首は後水尾院について詠まれており、「かくてまた」と以下の4首とは区切られている。特にその一首が他の4首への下敷きとなり、見解を及ぼしているようである。また歌<2><3>それぞれは^{註31)}、その場に居合わせる靈元院自身と普明院について詠まれたものである。「たらちね」「親」といった詩句や影像前において詠歌された状況に照らしても、その内容は後水尾院と無関係ではない。続く歌<4><5>については共に上の句「此山」から詠み出されており、下の句「君がみゆき」とともに歌<1>における後水尾院を意識しつつ、その内容が修学院離宮の場所、もしくはそこへの御幸に由来するものと考えられる。以下順を追ってそれら歌の解説を行う。

まずはじめの歌<1>では、靈元院の故後水尾院に対する敬意をみることができる。崩御することによって「蓮の臺」に上りつめた後水尾院は、靈元院にとって「あふぎみむ」べき「上のうへ」に居るとされる。それは「さとみし」と詠まれるように影像に直面することにおいて知り得た分際の相違である。この歌において「あふぎみむ」というその視線は、下方にいる靈元院から「うへなる」後水尾院へと向けられたものである。

しかしながら、つづく歌<2><3>ではその視線が逆転する。まず歌<2>^{註32)}であるが、すなわちここでは「みそなわす」といわれており、靈元院を眺める「たらちねの」父後水尾院からの眼差しが詠まれている。それは未だ「をしへし道にいたりえぬ身」として映るであろう靈元院自身を省みたその眼差しである。言い換えるならば、後水尾院によって「あわれ」とさえ見受けられるであろうとする靈元院の自覚である。この歌<2>は前の歌<1>とともに詠まれることで靈元院が自らの立場を後水尾院に比したことが明らかになる。自ら「あふぎみむ」後水尾院への視線が、かえって靈元院自身を「みそなわす」ことをするように、後水尾院に触れることにより靈元院は「いたりえぬ身」としての自身を知るのである。

一方の歌<3>^{註33)}では「寿のみや」、すなわち老齢にいたった普明院について詠まれている。ここにおいても歌<2>と同様に後水尾院からの眼差しが注がれるのであるが、ここでのそれは普明院への慈愛の眼差しである。「今も猶」故後水尾院からの「まもり」が与えられているのであるから、普明院においては健康など差し障ることもないでしょう、と靈元院によっていわれる。後水尾院から今なお注がれる子らへの慈愛を、その影像に直面することで靈元院は感じるのである。この歌によって普明院の長寿が言祝がれる。

また歌<4><5>は共に「此山(この山)」から発せられている。「此山」とは後水尾院が「みゆき」した修学院の山であるから、共にそこへの御幸が歌の主題と関わることが予想される。歌<4>からみることをすれば、「十度はきけり」と後水尾院御幸の「数にあへて」靈元院は頻りに修学院御幸を繰り返す、と詠まれている。自らも修学院を訪れる靈元院の御幸は「君がみゆき」を追うものとして宣言される。前歌<2>を受ければ、靈元院のもとめる「行きさき」が「たらちねの」父後水尾院の「をしへし道」に重なって読まれ、そこに修学院離宮への御幸が介されていると考える。

他方の歌<5>では、靈元院の御幸が「君がみゆきのあとならばや」としてさらに強く意思表示されている。ここで「この山にあ

らぬ」と特にいわれることにおいて、かえって修学院離宮を仲介とする後水尾院への態度が明らかになるものである。前歌にひき続き靈元院の御幸が、後水尾院御幸の跡を倣うものであったことがここにおいても読みとれる。

以上靈元院における後水尾院とは「あふぎみむ」尊敬の先人であったと同時に、自ら「いたる」べき先達であった。靈元院は御幸する山々や野川へ後水尾院の足跡を求め行く。後水尾院のその跡を倣うことこそが靈元院自身の御幸における「志」でもあり、修学院離宮への御幸とはそうした後水尾院へとむかう契機となるのであった。

2-2. 「山莊」の意味

前節において靈元院の修学院御幸は後水尾院の跡倣う態度として示されたが、果たしてその「跡」とは何であるか。本節では修学院離宮御幸に際して靈元院によって追想される後水尾院を検証し、その遺した跡の意味について考察する。

享保7年9月の条冒頭において、靈元院は御幸の日取りが近づく夜の夢に後水尾院が現われたことを著している²³⁴⁾。

四日の夜の夢に故院をまさしくみたまつりし、(中略)かく此山莊にあそぶ事悦び思召にやとかしこまりいさみて九日になりて出たつおりにおもひつゞけし

此秋もまたたらちねをみし夢の

行えうれしきけふの山ふみ [7-9]

この夢の内容とは、現れた後水尾院と靈元院とが互いに言葉を交わすものである²³⁵⁾。それは享保6年の御幸の際、夢に後水尾院が現れて以来の2度目の出現であった。靈元院は後水尾院出現の意味について「此山莊にあそぶ事悦び思召」すが故にであろうと考えている。そして後水尾院が靈元院の御幸を「悦び思召」していると考えるからこそ「かしこまりいさ(勇)」むのである。ここでは靈元院にとっての修学院御幸が単に靈元院その人の事柄においてのみ始終するのではない。後水尾院によって発せられた何らかの思いというのが靈元院によって気遣われているのである。靈元院の修学院離宮御幸には、亡き父後水尾院からの意思が強く意識されていたことがわかる。

それに続く歌では、靈元院の御幸が後水尾院の夢の出現によって「うれしき」ものとされている。靈元院にとっての修学院離宮御幸、すなわち「けふの山ふみ」が「たらちねをみし夢」によって保証された。言い換えるならば、夢に出現した後水尾院が「悦び思召」ことによって、靈元院の修学院離宮御幸が後水尾院その人によって確かなものにされたと考えられる。靈元院にとって後水尾院とは、その自らの御幸を承認しうる存在としてここでは現れている。

靈元院御幸における後水尾院の承認の仕方には上記の例と異なったものもある。

いく秋もわがたらちねの君が見し

例としてこめづる紅葉は [9-9]

享保9年9月の御幸におけるこの歌は修学院の山を染める紅葉について詠まれた。靈元院にとってその紅葉とは「たらちねの」父後水尾院が「見し例」であるが故に「めづる(愛づる)」ものであったと

されている。それは文中に「こそ」と強意されるところにおいて特に思い入れられたものとなる。靈元院にとって「たらちねの君が見し例」こそ後水尾院自身によって経られた経験であり、積極的に跡倣うべきものであったと考えられる。

また享保6年9月の条²³⁶⁾では、靈元院の修学院御幸に際して、かつて交わされた後水尾院との対話が思い返されたことが記されている。

おなじ院のみかどのやそちの御賀にまいらせし、しろかねの杖にむすびつたりし歌の御かへりごとに、つくからに千とせの坂もふみわけてきみがこゆべきみちしるべせんとありし、この山莊は代々の離宮にとおぼしをきてさせ給へたりしもむなしからざる事にてまでもおもひよそへられて

ちりぬとももみちふみ分さほ鹿の

跡つけそへん秋の山みち [6-9]

かつて後水尾院八十歳の祝賀に靈元天皇は歌を贈っている²³⁷⁾。しろかねの杖に結ばれたその歌にあやかりつつも、後水尾院の返歌にはある後水尾院自身の意思表示がされる。

その返歌「つくからに千とせの坂もふみわけてきみがこゆべきみちしるべせん」には「みちしるべ(道標)」という後水尾院から靈元院への、或いは「千とせ」という子々孫々の未来への、道程を自ら示そうという意思表示されている。靈元院はその「道標」の解釈として「この山莊」、つまり修学院離宮とは、後水尾院が積極的に遺そうとした意思としての「代々の離宮」であるべきだと考える。すなわち靈元院にとって、それは「こゆべきみち(来ゆべき道)」が示された道標でもある。後水尾院が「おぼしをきてさせ給へたりし」道標として、靈元院自身を含む後生の者を導いているのである。

それを受けた靈元院の歌は「ちりぬとももみちふみ分さほ鹿の跡つけそへん秋の山みち」と詠み返されて、後水尾院の意思に対して自ら応えてゆくことを誓う。後水尾院から靈元院へと授けられた意思は、ここで「跡つけそへん」意志の誓いとして靈元院から後水尾院へと贈り返される。後水尾院が杖を「つく(突く)」その「山みち」を靈元院が「跡つけ(跡付け)」るのである。靈元院御幸についての後水尾院の承認とは、そうした内実を伴ったものとして示された。

一方後水尾院によって「おぼしをきてさせ給へたりし」ものとは観念としての道標を指すだけでなく、それは実際に造営された修学院離宮であった。靈元院は修学院離宮を御幸するに際して「跡つけそへん」と意思表示した。すなわち後水尾院が「つく」ことをしたものこそ、築くことをされた修学院の離宮である。靈元院においてその修学院離宮とは誰よりもまず後水尾院その人によって築かれたものであり、ここではじめて作者としての後水尾院が現れたのである。

3. 後水尾院追想の場所

3-1. 寿月観の花、浴竜池での船遊

前章において後水尾院とは道標を自ら遺した修学院離宮の作者として現れた。靈元院はそこへの御幸に「跡つけそへん」と意思表示をしたのであった。本章では靈元院御幸における経験のうちに後水尾院追想の事態を見、靈元院御幸の場所について考察する。

享保9年5月、靈元院の修学院離宮御幸が催されている。

ことは五月になりて名におふ花のさかりを見にゆくべしとかねてより仰を

きてたりし、此花寿月観のまへなる庭にあまたあり、これは舊院の御時にうへをかれたれば今はたぐひなし、おほきにひろごりたる木十七八本もあるなり [9-5]

ここで「名におふ花のさかりを見にゆくべし」といわれる。「舊院」後水尾院の時代に「うへをかれ（植え置かれ）」た花を見に行くことが靈元院御幸の動機となっているのである。すなわち後水尾院が眺めたであろうものがここでの景の対象となっている。寿月観の前に多く植え置かれたその花は今では「たぐひなし」と賞されており、「おほきにひろごりたる木十七八本もあるなり」と靈元院はその光景を思い描いている。その描写からして、花木は時を経て後水尾院時代より姿形を変えたものかもしれない。しかしながらそれが「名におふ花」であることが御幸の動機になったことには違いない。花の盛りに御幸することを「かねてより仰をきてたりし」ところには、それら後水尾院の花木が靈元院にとって御幸の動機たるには十分な景物であったと考えられる。

同じく享保10年4月の条。

ことは五月の花を見むとて、卯月のすへの六日例の山荘に行く、(中略)道の程いとあつかりしかば、しばらく寿月観にすだみてさつきの花をみる、故院の御時植おかれしかば、いにしへのさまの花にて、所々とさきたり [10-4]

本記事も前述と同じ季節であるので、前述の寿月観前に植えられていた「名におふ花」も同じ「五月（サツキ）の花」であったかと考えられる。ここにおいても「故院の御時植おかれし」サツキの花を見にゆくことが靈元院御幸の動機となっている。靈元院によって「いにしへのさまの花」といわれるところは、後水尾院時代のサツキの花とその現況とが、ある同一性において捉えられていることを示すものである。前述の享保9年の条において後水尾院時代のサツキの花と現況の花とが、異なる姿形のものとして捉えられていたとすれば、本条におけるその「いにしへのさま」とはいわば姿形をこえた同一性を互いに結ぶものである。靈元院によって見られる景物としての対象物、すなわち「五月の花」には、ここでその物としての姿形をこえて後水尾院の由来が見出されているものと考えられる。

また享保16年10月の御幸において、靈元院は上の御茶屋浴竜池で舟遊び^(註30)を催している。

山荘の池に舟をうかべたる事は、むかし後水尾院の御幸ありし時代のまゝにて、その舟多年残りてありしかどもいつの程にか朽損じて、後は四十余年をへて舟のうかべる事なし、此たびは舟の興を催すべし(中略)うかべたる舟にのる、(中略)めづらしき事とこなたかなた漕めぐる、中島のほとりにいたりてみれば、そのかみ七十年まへに舟にのりてとをりし事たしかにおぼへたる赤石二つのあいだあり、只今のれる舟は大きなればとほるべからず、そのうへ多年手を入ざりし池なれば土のなだれ、草芥もかさなりて、いまは小舟ならでは通るまじきさまなり、此所舟にのりてみれば汀よりは見へず、七十年前幼少の昔さらにおもひでてみる [16-10]

「四十余年をへて舟のうかべる事なし」と浴竜池における舟遊は後水尾院時代の御幸から途絶えていたものであった。当初の舟はその後残っていたようであるが、靈元院御幸当時にはすでに朽ちていた。靈

元院は本御幸に際して角倉家から高瀬舟を取り寄せている^(註30)。「むかし後水尾院の御幸ありし時代のまゝにて」と、そうした労を惜しむことなく靈元院は後水尾院御幸をここで再現するのである。

その御幸においては「めづらしき事とこなたかなた漕めぐる」ことをしているが、やがて「七十年まへに舟にのりてとをりし事たしかにおぼへたる赤石二つのあいだあり」と、とある岩間を見つけそれを思い返す。靈元院は幼少の頃後水尾院の御幸に伴件しており^(註30)、その折に見た光景を、その景物に促されることで回想する。その後の記述ではその岩間へと進入できないでいたことを細かに説明するので、そこで進入を試みたか、もしくは進入しなかつたことを悔やんだものと考えられる。前章において靈元院の修学院離宮御幸とは、後水尾院が経たであろう経験を「跡つけそへん」とする態度の表示であったと同時に、後水尾院によって築き遺されたその跡への「跡つけ」として示されていた。すなわちこの御幸においても靈元院は幼少の時分後水尾院と共に巡った遊興を細かに追体験しようと試みたものと解される。「後水尾院の御幸ありし時代のまゝに」御幸を再現するその中に、「七十年前幼少の昔さらに思ひいでてみる」として自身の回想を巡らせたのである。

3-2. 修学院八景と隣雲亭

本節でもやはり後水尾院追想のされ方を御幸の場所にみてゆくが、そこに現れる後水尾院はもはや実体的な景物を伴っては現れてこない。本節ではそのような靈元院の経験に御幸の場所をみる。

弥生のはつかあまり八日、山々のつゝじのさかりなる頃なれば、松ヶ崎、加茂の壇のつゝじなどもみるべし、また西加茂の山に幸茶壇といふ所は旧院御幸の事ありし所にて、それゆへにところのもの今幸茶壇といふよしなり、さらば此所にも行べしとて出たり、

有明の月を都にかへりみて

ゆけばそなたの野べ遠き道

とみちすがら口さびて行 [14-3]

享保14年3月の条、靈元院は西加茂幸茶壇といわれるところへ御幸する。そこはかつて後水尾院が御幸した故に土地の者にそう呼ばれるようになった所縁のある場所である。「さらば此所にも行べし」と、ここでも後水尾院のそうした所縁が靈元院御幸における動機のひとつとなっている。

その道すがら、靈元院は歌を詠んでいる。早朝の月を都に送りつつ行く靈元院の「野べ遠き道」とは父への追想であるが、同時にかつての御幸を追う道程でもある。前章を鑑みれば「跡つけそへん」といわれた後水尾院が通ったその「山みち」である。靈元院において対象としての景物ではないところに後水尾院が現れる。それは道標を据えた作者としての後水尾院である。

享保8年9月の御幸。

それより赤山にゆきて松茸をとる、いただきまでのぼりぬれどけふもまたくもりたれば淀川も見へず、隣雲にかへりきて、とかくする程にくれぬ、夜になりても曇りふたがりしかば月はみゆべくもあらず、雨ふり出でぬべしといへば心あはたゞしけれど、此山荘の八景に隣雲夜雨とあるをふとおもひいで、

月くらき雲の隣の瀧の音を

夜の雨とや聞てかへらん [8-9]

その日の御幸ではあちこちと巡った末の夕刻、靈元院は上の御茶屋隣雲亭に落ち着いている。その日は「夜になりても曇りふたがり」の天候で、隣雲亭からは切望した「月はみゆべくもあらず」であった。ただでさえ空は曇り、月が見えぬ状況にあって、しばらくの後には雨さえも降り出せば、靈元院は「心あはたゞし」であった。しかし「此山荘の八景に隣雲夜雨とあるをふとおもひいで」と靈元院は歌を詠む。その歌「月くらき雲の隣の瀧の音を夜の雨とや聞てかへらん」は修学院八景の「隣雲夜雨」⁽⁴⁰⁾を本歌として詠まれている。「夜の雨とや」といわれるところには、その「隣雲夜雨」によって提示された状況を受けているのである。心慌ただしい程に月を切望していた靈元院は、かつて後水尾院によって編まれた修学院八景歌を受けることで、むしろその情景をそこに再現することで月が見えぬ状況を忍ぶ。後水尾院を做うことによって、月を見ずとも心を慰め得たものとする。ここにおいてもその追想を媒介する景物は見当たらない。そればかりか父への追慕でもない。むしろ後水尾院によって開示された経験の仕方が、直に靈元院の経験に重なっているものと考えられる⁽⁴²⁾。

結

靈元院の御幸ではその山々野川に後水尾院が追想されており、それは場所の経験であった。靈元院にとつての後水尾院とは跡做うべき存在であり、靈元院の御幸において後水尾院の「見し例」こそ「愛づる」態度が認められた。後水尾院御幸を跡做うことで、靈元院自身の修学院御幸もまた保証される。後水尾院の経験とはすなわち遺された「道標」として示され、靈元院はそれを「跡つけ」ることでその意思に応えたのであった。またその「道標」とは意味を媒介する実体的な景物としてもあらわれたが、一方で実体を伴わない「道標」があり、それは開示された経験の仕方であった。ここにおいて靈元院の「跡つけ」は後水尾院によって促されてはいるがしかし自らの状況の経験といえよう。靈元院にとつて修学院離宮という御幸の場所は、その作者としての後水尾院が生きた場所であったと同時に、靈元院自身もまたいわばひとりの制作者として後水尾院を生きた場所であったといえる。

注

本文中引用部 [7-9] などの記号は『靈元院法皇御幸宸記』内記事の日付を表している。例：[7-9] (享保7年9月の条)

注1) 「今朝未明、仙洞、女院御所長谷御幸、先於朱閣寺而被爲成、於圓照寺尼公宮而御弼振舞之由成」(『隔葉記』承応4年3月13日の条) 当時修学院には後水尾院皇女智女王が建立した円照寺があり、後水尾院は長谷殿への御幸途中にそこへ立ち寄っている。またその直後同年8月には円照寺が山端利即院へと移転し、続いて10月には大和国八島に移っており、円照寺移転完了後に修学院離宮造営が開始されたものと考えられている。(伊藤ていじ: 解説、宮廷の庭Ⅲ修学院離宮、淡交新社、1968 参照)

注2) 修学院離宮完成の時期は正確には不明であるが『隔葉記』における万治2年4月の「仙洞御振舞」直前とする説(森蘊: 修学院離宮の復元的研究、養徳社、1954)、万治3年1月の『隔葉記』「御茶屋出来の模様被仰聞」をもって上下茶屋の完成とする説(重森三玲他: 修学院離宮庭園、日本庭園史体系第18巻・江戸初期の庭(5)、思想社、1974)、万治3年3月『隔葉記』の「完成」の語をもってそれ以降とする説(熊倉功夫: 後水尾院、朝日新聞社、1982)、万治3年8月の披露をもって完成とする説(日向進: 桂離

宮・修学院離宮、御所と別業 一雅びの系譜一、講談社、1984) などがある。

「離宮はしだいに完成していった」(久恒秀治: 京都名園記 中巻、誠文堂新光社、1968, p. 88) といわれるように修学院離宮の整備は後水尾院が御幸するようになってからも引き続いて行われ、また度々の焼失ならびに移転、もしくは千歳橋などの築造によってその構成は現状に至るまで大きく変遷し続ける。本稿では上下茶屋が両者ともに一応の整備がなされたとされる万治3年3月頃をもってとりあえずの完成の時期と捉える。

注3) 『隔葉記』寛永18年7月14日の条をひいて、森は後水尾院が修学院離宮造営以前に北山方面にて離宮適地の物色を行っていたとする。また続く18日には鳳林承章が「屋敷之絵図」について後水尾院と談合を行っており、離宮造営に理想的な適地の調査が側近を介して子細に行われていたとする。そのことから後水尾院が離宮造営に関して積極的な関与をしていたとされる。(森: 前掲注2) 参照)

注4) 作者の問題については以後本文において論ずるが、例えば離宮造営の敷地選定についても諸説あり、「この地が選ばれたことについて、とかくの説があるけれども、真に確實な據りどころはないらしい」(高桑義生: 修学院離宮、芸艸堂、1948, p2) といわれる。後水尾院の円照寺御幸において院自身が離宮造営地を確信したとするもの(北小路功光: 花の行方、駸々堂出版、1973 参照)と、幕府の意向によって現在の位置が決定されたとするもの(中村直勝: 後水尾天皇御紀、中村直勝著作集 第6巻 歴代天皇紀、淡交社、1978 参照)とが大きくあげられる。

注5) 享保期近衛家に医師として参候していた山科道安による伝聞の記録。本稿では「槐記〔抄〕」(中村幸彦他編: 近世随想集 日本古典文学大系96、岩波書店、1965 所収)を用いた。

注6) 『槐記』享保19年2月24日の条

注7) 森は修学院離宮造営について「経営者後水尾上皇御自分が先頭に立たれ、現地指導されたものに相違なからう。そして更にその下には相當な腕利きの技術者の協力があつたのであらう」という。またその作者については『槐記』の記事をひき「これによつて見ると、「盡く後水尾院の御製」であることが既にその頃知られていたようである。(中略) その上に「ふとあの山を御手に入れてより」「あの地勢山水を御考にて」草木、岩石の配置に至るまで、自ら女装して内内現地へ通つて來て指導なされたことが知られるのは非常に面白いと思う」といい、後水尾院自身が直接現地に赴いて作事指導したことを主張する。(森蘊: 修学院離宮、創元社、1955)

注8) 北小路は『槐記』の内容における幾つかの誤記を指摘しながら「この説話が元となり、修学院の一本一草すべて法皇の御意向通りに作ったという説が出ると共に、薦包みの輿に乗ったのは実は女装した法皇御自身であるとの解釈も生じた。勿論あり得る事ではない」という(北小路功光: 修学院と桂離宮 一後水尾天皇の生涯一、平凡社、1973)。また熊倉は『槐記』の内容について「伝聞であるから、どこまで真実か確かめようもないが、修学院離宮が後水尾院が心血をそそいだ創作であったと、公家のなかに伝えられていたことだけは事実である」とする。(熊倉: 前掲注2) 参照)

注9) 平松可心、赤塚芸庵、鳳林承章などが参画し後水尾院と談合を重ねて造営したものと考えている。森: 前掲注7), pp. 100-105 参照

注10) 『菟芸泥赴第五』(増補京都叢書第5巻、京都叢書刊行会、1934) p. 273

注11) 『東北歴覧之記』(増補京都叢書第3巻、京都叢書刊行会、1934) p. 80

注12) 『雍州府志』(増補京都叢書第3巻、京都叢書刊行会、1934) p. 9

注13) 『京羽二重織留巻之二』(増補京都叢書第6巻、京都叢書刊行会、1934) p. 76

注14) 現代の随筆等においてもしばしば修学院離宮をして「帝王の庭」と称されることがある。「後水尾院の計画された山荘が、その御氣性のように雄大に力強く表現されたものである」(重森完途: 修学院、中央公論美術出版、1964) といわれ「修学院の庭が、帝王の雄大な氣宇を感じさせるものだ、ひろく人が言うのは否定することができない」(大佛次郎: 文、宮廷の庭Ⅲ修学院離宮、淡交新社、1968) などともいわれる。また「修学院離宮」の主人公は後水尾上皇である。したがって、その建築や庭園の美しさに上皇の性格が反映しているのを認めねばならぬ」(谷口吉郎: 修学院離宮、淡交新社、1962, p. 78) などの印象も離宮の場所に後水尾院の性格や人格があ

らわれ、読みとられているものであろう。

注15) 『靈元院法皇御幸宸記』の記事による。

注16) 靈元院の修学院離宮御幸について「靈元院の修学院御幸記ともいうべき『元陵御記』(本稿で扱う『靈元院法皇御幸宸記』の別書:筆者注)は、後水尾院に対する思慕の念が如実に窺われる」(中川豊:靈元院の文学活動—地下歌壇とのかかわりを中心に—, 中京大学教育論叢, 第43巻, 第2号, p. 450, 2002. 10) といわれている。

注17) 宮元健次:修学院離宮物語, 彰国社, 1994, pp. 9-20, pp. 115-117、北小路:前掲注8) pp. 155-157、西和夫:近世の数寄空間—洛中の屋敷、洛外の茶屋—, 中央公論美術出版, 1988, pp. 17-50 など。

注18) 拙稿:修学院離宮における「離宮」の場所についての一考察—『靈元院法皇御幸宸記』の解説を通して—, 日本建築学会計画系論文集, 第601号, pp. 217-224, 2006. 3

注19) 国立公文書館蔵。別書として『靈元法皇修学院御幸之事』『靈元太上法皇御幸宸記』『元陵御記』などある。本稿では『靈元院法皇御幸宸記』を用いたが、活字並びに構成の確認を『翁草』(日本随筆大成編集部編:日本随筆大成, 第3期, 第12巻, 日本随筆大成刊行会, 1931)と『元陵御記』(藤井稔治他編:靈元天皇実録第2巻, ゆまに書房, 2005)に求めた。『靈元院法皇御幸宸記』を用いた既往研究については拙稿:前掲注18)の注10)参照。

注20) 久保貴子:近世の朝廷運営—朝幕関係の展開—, 岩田書院, 1998, p. 56

注21) 靈元天皇在位中における近衛基熙との対立、小倉事件、一条兼輝の関白就任などの事態が天皇讓位後における院政確立の志向を裏付けていたものとされる。「靈元天皇は後水尾法皇にかわって、名実ともに朝廷の頂点に立ち、自己の目指す朝廷像の実現のため、側近の者たちとともに種々画策する。(中略) 同天皇は、天皇もしくは上皇という天皇家の長による親政を理想としていたのである」久保:前掲注20), pp. 127-128

注22) 米田雄介:朝儀の再興, 辻達也編:日本の近世2天皇と将軍, 中央公論社, 1991, pp. 155-202 参照

注23) 山口和夫:靈元院政について, 今谷明、高埜利彦編:中近世の宗教と国家, 岩田書院, 1998, pp. 311-342 参照

注24) 中村直勝:後水尾天皇とその御代, 中村直勝著作集第11巻歴史の発見(上), 淡交社, 1978 参照

注25) 鈴木健一:解説, 和歌文学大系68 後水尾院御集, 明治書院, 2003, pp. 255-272 参照

注26) 上野洋三:近世宮廷の和歌訓練『万治御点』を読む, 臨川書店, 1999

注27) 島原泰雄:後水尾院とその周辺, 近世堂上和歌論集刊行会編:近世堂上和歌論集, 明治書院, 1989, pp. 39-59 参照

注28) 鈴木健一:近世堂上和歌壇の研究, 汲古書院, 1996、同:靈元院とその周辺, 近世堂上和歌論集刊行会編:近世堂上和歌論集, 明治書院, 1989, pp. 60-85 参照

注29) 中川:前掲注16), pp. 445-460 では靈元院歌壇における地下歌壇との関わりを中心に、後水尾院歌壇との相違と共通について検証している。

注30) 当時靈元院の修学院御幸は幕府に管理されており、所司代に日程その他を告げたうえで御幸が可能であった。それまでの御幸回数は年2回であったが、本記事の直前に年3回へと増やされた。靈元院は林丘寺にたちより、御幸回数が増やされたことについて普明院と喜びあっている。御幸回数が増やされた過程は以下の通りである。「此春比上田の侍従忠固しばらく京にのぼりて東へくだりしおり、例の老禪尼公より大樹へことづて申させおはして、山莊へ御幸の事今まで年に二度なれば対面あまりに稀になることになん、故院には年に幾度と御幸ありしなり、せめては今一度もか

ずそへまほしきことゝおもひ給ふるよしを、よからんついでに申さしめよと仰やり給ひし(中略) 大樹へよきついでに申さしめつれば、高歳の宮の御願ひごとゝいひ、われら養生のたよにもなりぬべくば、春秋の外に今一度かずそへられよと申さるゝよし、かへりごとに申入つる程に、そのおもむきを所司代田辺侍従英成に仰きかせて俄にもよほしたるなり」[10-10]。

注31) 歌<2><3>の順列について『靈元法皇御幸宸記』(西:前掲注17)所収)、『靈元帝修学寺御幸宸記』(『翁草』前掲注19) pp. 369-405)ではそれらが逆になっている。本稿では『御幸宸記』の順列に従っている。

注32) 後鳥羽院「さまざまにをしへし道のかひあればつひにはふかくさとりいでにき」(後鳥羽院御集, 正治二年第二度百首釈教五時方等) 参考。

注33) をのちふるの母「たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなどめそ」(古今和歌集, 巻第八離別歌) 参考。詞書は「小野千古が陸奥国の介にまかりける時に母のよめる」。

注34) 『御幸宸記』における靈元院の夢に後水尾院が現れた記事は他に享保6年9月、同9年10月、同12年9月それぞれの条、計4回に及ぶ。

注35) 全文を以下に記す。「四日の夜の夢に故院をまさしくみたまつりし、こなたへ御幸なりとて御輿よせたるころへ参りて、わた殿の程御手を引たまつりおましにいさせ給ひても、のどやかにみものたりなどせさせ給と、さだかに見侍し、さめて後おもへばこそ此山莊へはじめて行つる前つかたみたまつりし夢の事をおもひいでゝ、かく此山莊にあそぶ事悦び思召にやとかしこまりいさみて九日になりて出たつおりにおもひつゞけし」[7-9]

注36) 享保6年9月の御幸についての詳細は西:前掲注17) 参照。

注37) 「今日被進御杖之竹ノ葉御短尺ヲ被付當今御製、君が手にけふとる竹の千世の坂こえてうれしき行衛をもみむ、法皇御返歌、つくからに千とせの坂もふみわけて君がこゆべき道しるべせん」『基量御記』延宝3年11月14日の条。また後水尾院八十の祝賀の様子については他に『基熙公記』『堯恕法親王記』『御ゆとのゝ上の日記』にも詳しく記される。

注38) この日の御幸についての詳細は北小路:前掲注8) 参照。

注39) その様子について「角倉が方にある高瀬舟のうちに山莊の池に相応すべき大きな舟あらば、かりまうくる事はなるまじきにやと、所司代に仰つかはしたればやすき事、申つべきよしを心よく申てやがて角倉に下知して取よす、高瀬ぶねの事仰出しつるは十七日の事なれば、その夕つかたより角倉が方もちいでゝ山莊へつかはす、長さ七間あまり幅一間にあまれる舟なり、雑人百人あまりにて河原をもちゆく」[16-10]とあり、靈元院から所司代を通じて角倉家に依頼されている。

注40) 後水尾院御幸に同伴した靈元院の修学院離宮訪問について『御幸宸記』には「むかし寛文ふたつのとしにやありけむ、故院この山莊にみゆきせさせ給ひて、いざなはせ給し事ありき、九歳の時にて(後略)」[6-9]とある。本記事が享保16年のものであることから72年を隔てている。

注41) 中院通茂「今宵きく雲のとなりの夜の雨にたが名にしほふえとも忍ばん」(修学院八景, 隣雲夜雨)。修学院八景詩歌の後水尾院による添削の過程については、岩間香:修学院八景, 寛永文化のネットワーク—『隔葉記』の世界—, 思文閣出版, 1998を参照。

注42) 同種の経験が寿月観における観月の歌としても靈元院によって詠まれている。「千代までとしめをく庵の名もしるき月にことぶく山里の秋」[7-9]。この歌において寿月観を「しめをく」ことをし、さらにそれを月に寿く「庵」として名づけを行ったのは後水尾院であるから、ここでの靈元院の経験もやはり後水尾院によって開示されたものに由来すると考える。

(2006年6月10日原稿受理, 2006年9月20日採用決定)